



職務怠慢で  
解雇されかけた  
使用人が

旦那様専属  
人間オナホール  
にされるお話

Written by Nanami Tsumori



すずか

### 鈴鹿レイ(20)

佐渡家の新米使用人。  
新卒採用されたが、実際は不採用の  
ところを祖父の口添えて雇ってもら  
えた。本人もそれを知っているようで  
灰原にいくら叱られても「絶対クビに  
できない」と高を括っている。



さ ど ひであき

### 佐渡秀昭(31)

佐渡家の旦那様。独身主義。  
加えて、仕事ができない者を屋敷に  
置かない主義だが、夜の相手として  
レイを屋敷に置くことにする。  
仕事ができる使用人には優しい。



はいばら

### 灰原(49)

佐渡家の執事頭。  
いくら指導しても勤務態度を改め  
ないレイ君に手を焼くも、旦那様に  
依頼されてレイ君を調教することに。  
きれいなグレイヘアを目指して理髪  
店に足繁く通っているらしい。

## 目次

1. 執事頭の臨時業務（前編）	4
2. 放置された使用人	23
3. 執事頭の臨時業務（後編）	37

## 1. 執事頭の臨時業務（前編）

私は佐渡家さどけの執事頭しっしがしら、灰原と申します。

本日は普段の業務に加え、午後から臨時業務が一件。素行の悪い使用人名を、旦那様専属の人間オナホールに調教するお仕事です。

「おい白髪メガネ！　僕にこんなこととしていいと思ってるのか！？　おじい様に言いつけるぞ!?!」

ああ、失礼しました。彼が本日調教する使用人、鈴鹿すずかレイ君。今、ベッドに両手足を縛りつけたところです。色素の薄い茶色の髪と瞳をした、中性的な顔立ちの美青年。ホテルスクールの新卒で、ここ半年ほど育成に励んでいたのですが、これがまあ大変で……

まず、頻繁に遅刻する。そして目を離すとすぐに怠ける。頼んであった仕事をしばしば忘れる。ミスを指摘されても「お前の教え方が悪いせいだ」と言つて、てこでも謝らない。使用人の仕事どうこう以前に、社会人として至らぬ点が多々あります。

それでいて、「早く旦那様のお世話係にしてよ」などと私に迫ってくるものですから、他の使用人たちからも呆れられる始末。

本来なら職務怠慢しよくむたいまんで解雇するところですが、実はレイ君、大旦那様が取引なさっていた鈴鹿紡績の前会長、鈴鹿雅彦さんのお孫さん。成績不良で不採用となるところを「昔のよしみでどうか働かせてやってくれ」と頼まれて雇した子なのです。

レイ君も縁故採用だと知っていて、一向に勤務態度を改めないのだと思い

ます。どんなに怠けようが絶対に解雇されないと高を括って。

しかし、我らが主人——佐渡秀昭様（三十一歳）ひであきに誠心誠意お仕えしない

者を野放しにするなど、執事頭の矜持きょうじが許しません。

そこで旦那様に許可をいただき、鈴鹿前会長にお会いしてまいりました。

名目は「お孫さんの近況報告」だったのですが、彼の不真面目な働きぶりを聞くなり、解雇してよいかのご相談だとすぐにご理解いただけました。

鈴鹿前会長……レイ君のおじい様がおっしゃるには、二人のお兄様は優秀なのに、末っ子のレイ君だけはいつの間にやらわがまま坊ちゃんに。

昔はああではなかったのにと嘆いておられましたが、そう言われてみればレイ君がまだ幼い頃、お兄様たちに連れられて遊びに来た時は「年の割にお行儀の良い子だ」と感心したのを私も思い出しました。

住み込みの使用人として厳しい指導を受ければ甘えた考えもなくなるかと思つて佐渡家に頼んだが、試用期間中にクビになつたと知られれば、この辺りではもうどこも雇いたがらない。どんな形でもいいから孫を働かせてやつてくれと頼まれました。

屋敷に戻つて旦那様に報告したところ、「手に負えないのを理由に他所へ放り出すのが鈴鹿の教育か」と呆れ切つたご様子で。

これは解雇秒読みかと思つたのですが、「まあ鈴鹿のじいさんの頼みなら仕方ないな」とおっしゃつたのです。仕事ができない者を屋敷に置かない主義の旦那様が、めずらしいこともあるものだなと。

それでレイ君に任された新しいお仕事というのが、旦那様の夜のお相手だつたというわけです。これまためずらしいことをと思つたのですが、まあ正

直、私もレイ君の良いところが顔くらいしか思いつかず。育成にかかったコストが無駄になるより「レイ君でも簡単にできるお仕事」を与える方が好都合ですので、お忙しい旦那様の代わりに私が調教を引き受けた次第です。

さあ。きっちりお給料分、旦那様の性生活に役立ってもらいましょう。

「おい聞いてんのか百パーセント白髪頭！ 変態メガネ！」

やれやれ……頭を抱えてしまいます。どうやら言葉遣いも指導しなければならぬようで。ちなみに私は決して白髪百パーセントではなく、美しいグレイヘアになるよう理髪店に足繫く通っているだけです。

先が思いやられますが、とにもかくにも調教を始めてまいりましょう。

執務中にいつも身につけている白い手袋を脱ぎ、代わりに黒のレザーグローブをはめました。そして髪を逆立させんばかりの怒声を発し続けるレイ君



のシャツを掴み、ぶちぶちと強引に胸元を開いてみせます。

こういう我儘な子の心をへし折る。そのためにはどちらが上かはっきりと見せつけることも必要なのですが、手荒なことをする機会など滅多にないのであまり慣れませんね。

シャツのボタンが弾け飛んで胸が露わになると、レイ君の怒声が急に途切れ、頬が赤く染まりました。なかなか可愛らしい反応です。きっと、こんなことをされるのは初めてなのでしょうね。

「なっ!! なっ……何すんだよ!!」

「レイ君。君は以前、私にたずねましたよね? いつになったら旦那様のお世話をできるのかと」

「それは……聞いたけど?」

「これは旦那様のお世話係になる準備です。今の業務は難しいようなので」

「……？」

いまいちピンと来ていないようですが、まあ追々わかることですから。

まずは乳首の開発からまいりましょう。

ベッドサイドの棚から取り出したるは、感度を向上させる成分が配合されたローション。旦那様にレイ君の調教を依頼されたその日、通販で注文しておきました。

このように便利な品が注文した翌日に届くとは、私が若い頃に比べて実に良い世の中になったものです。

それではこのローションを乳首に塗りこみましょう。透明でぬるりとした液体をたっぷりと丸筆に含ませ、レイ君の乳首にぺとり、と置いた瞬間――



「——っあ♡」

「おや。なかなか素質がありそうですね」

「あ!? やめろよ! このっ、変態執事!」

何やらうるさいですが気にせず塗りこみます。もう片方も丁寧に……おっと。早くも反応してまいりました。

硬くなり始めた乳首を筆の先でくすぐってみましょう。

つつっ……こしょこしょ♡ くりくりっ♡

「つく♡ やめっ……やっ♡ あっ♡♡」

「おや。先程までの威勢はどうしました?」

素直になるまで筆で<sup>なぶ</sup>拂い続けてもよいのですが、今晚には旦那様にお使い  
いただきたいと思うと時間が足りません。開発の続きは玩具に任せましょう。  
こちら、吸引した乳首を振動で刺激する乳首ローターです。

丘状のシリコンカップをつまんでしっかりと空気を抜き、乳輪ごと吸引し  
ます。透明なカップの中で乳首が強制的に勃起させられている様子が見えてと  
れますね。

そしてシリコンカップの頂点に付属のローターをセットし、スイッチオン。  
ブブブと振動音が始まるとともに、レイ君の胸がビクンと跳ねました。

「っあ♡ やっ♡ 止めろよ白髪ジジイ！ ひっ♡ とめっ、止めてっ♡」  
ローターの振動が乳首にしっかりと当たっているようですね。レイ君がし  
きりに止めろと言っていますが、まだ開発は始まったばかり。

お次はペニスを勃たたせて……と思いましたか、すでにスラックスが窮屈きゆうくつそうに見えます。

「レイ君？ もう勃たってしまったのですか？」

「そっ、そんなわけっ♡ ないっ♡」

だそうですので確認してみましよう。

ベルトを外し、スラックスの前をくつろげます。

そしてボクサーショーツをくい引き下げてみますと、ふくれあがったペニスがぷるんと顔を出しました。平均的なサイズよりも少し小ぶりといったところでしょうか。乳首への刺激だけで完全に勃起しています。

「ふむ。乳首ローターが随分と気に入ったようで」

「みっ♡ 見るなよ！ 気に入ってなんか、なっ♡ いっ♡」

まじまじと観察しているうちに、先ばしりの汁が溢れてきました。短時間でこの有様とは、まったく堪え性のないペニスです。

人間オナホルの責務はあくまでも、旦那様に気持ちよく射精していただくこと。このままでは旦那様の前で粗相してしまう可能性大ですので、射精を管理しましょう。

この電子錠付きコックリングをペニスに取りつけると、尿道が圧迫されるため、達しても射精できません。解錠するには子機のボタンを押さねばなりませんから、勝手に取り外すこともできません。

子機の方は後程旦那様にお渡しして、お好きなタイミングでレイ君の射精を許可していただくとして。念のため、レイ君のペニスをしごいて射精できないことを確認いたしましょう。

「おいジジイ！ どこ触ってんだよ！ はなせよ！」

ペニスを握られて激しい抵抗を見せっていますが、ベッドが多少きしむだけで拘束具はびくともしません。では上下にしごいていきましよう。

「なっ♡!? 触んなって！ さわ、ンッ♡ まっ♡ 待って♡ 待って、いっ♡ 言ってるだろ!? やっ♡ やだっ！ やめてよお……っ♡」

乳首ローターに責められながらペニスをしごかれて、早くも音をあげ始めました。一定のペースでしごきながら様子をみましょう。

しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ まって♡ そんな、しちや♡ いっ♡ いっ♡ ちゃう、から……っ♡♡」

「構いませんよ。どうぞお好きにイってください」

「誰がジジイ相手に、いっ♡ ひゃああ♡ だめ♡ だめっ♡ 出ちゃう♡」  
頭を振り乱して必死に抵抗していますが、もう絶頂が近そうです。追い立てるように手の動きを速めると、レイ君の体がぶるりと震えました。

「もうイク♡ イっ——っ!? なっ、なんでっ♡ イったのにいっ♡」

達した快感はあるようですが、射精はできていませんね。念には念を入れて、もう少しだけしごき続けてみましょうか。

しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡ しゅこっ♡

「がっ♡ あああ♡ やめっ♡ イッてる♡ イッてるから♡」

体をのけぞらせて悶絶しています。先端から少しばかり精液が漏れてきました。あまり強く圧迫すると体に毒ですので、この程度は許容範囲というところで目を瞑りましょう。



「よろしい。これで少なくとも、旦那様より先に射精してしまう無礼をはたらかずに済みますね」

「ふうづ♡ これ、取っ♡ 取れよ変態メガネ……っ！」

やれやれ。少しは素直になってきたかと思っただけです。

まあ言葉遣いの指導は後回しにして、開発を優先しましょう。

お次はいよいよ、レイ君のお尻を旦那様専用のおまんこに作り替える作業ですね。時間短縮のため、感度を高めるローションを直腸に注入します。

先の丸くなったプラスチック製の注射器——シリンジにローションを吸わせるのを見てレイ君が震えています。

「そ、それ……何する気で……？」

ピンと来ていない顔。まったく用途が分かっていない様子ですが、足の拘

束を片方解いて、スラックスとボクサーショーツを脱がせると、何をされるのかようやく分かってくれたようです。

「……やっ！ やだっ！ やめろよっ！」

乳首に塗られて効果がわかっていいるからか、激しく抵抗し始めました。まあ気にせずに。もう一度足を拘束して、M字に開かせます。そしてシリンジの先端をローションで少し濡らし、お尻につぶっ♡と挿し込みます。

「やっ♡ そんなの入れたらっ……あっ♡ 入っ♡ やめ、てよお……！」  
とりあえず7mlほど注入しました。レザーグローブの上から指サックをつけて、会陰をローションでほぐしてから指を挿入します。ローションの潤滑でつぶぶっ♡とスムーズに入っていきます。

「ひいひい♡ やっ♡ やめろ、よ！ ひぐっ♡」

「おや？ 根元まで入りましたよ？ こちらも素質がありそうですね」

「ひゃあ♡ぬ、抜いてっ♡抜けってば……っ！」

必死に押し返そうとしますが、ゆるゆると抜き挿ししてやると、すぐに指を受け入れ始めました。甘い喘ぎ声を漏らしています。

「くっ……うう♡はあ……ンッ♡あっ♡ひうう……っ♡」

本当に、なかなか素質がありそうです。このまま拡張に入ってもいいのですが、それより先に「お尻だけで絶頂できるほどの快感を得られる」ということを体でよくよく学んでもらおうかと思っています。

根元まで挿入していた人差し指を第二関節のあたりまで引き抜き、ペニス側にぐっと曲げると、レイ君の体がビクンと反応しました。前立腺を刺激して、メスイキする感覚を知ってもらいましょう。

とんっ♡ とんっ♡ とんっ♡ とんっ♡ とんっ♡

「あひっ♡!? 何!?♡ あっ、うう♡ 待って♡ そこやだ♡ 変になっ♡  
なっっちゃう、から♡♡」

おや。良いところは顔だけかと思いきや、感じ方も非常に良いですね。これなら旦那様にも気に入っていただけそうです。

さてと。午後の仕事は他にもありますので、ここからの開発はまた玩具に  
おもちゃ  
お任せしましょう。

この束になった極小ローター。小指の先よりも小さいですが、ひとつひとつの振動は強力。押し出せるだけの大きさもないので、固定せずとも同じ場所を延々と責め続けることができます。これを前立腺が刺激される位置に挿入していきましよう。

「あっ♡ なに挿れて……ひうっ♡？ 待って♡!? そんないっぱいダメ  
いっ♡ 挿れないでえ……っ♡」

念には念をということで、五つ全部挿れてみました。小さいので拡張前でも楽に入りましたね。スイッチを入れると、まるで電気が流れたようにレイ君の体がびくびくと震え始めました。

「っあ!? ひっ、う♡ うああ♡ これとめっ♡ 止めて♡」

ちゃんと前立腺が刺激されているようですね。

あとはこの極小ローターと最初につけた乳首ローターにタイマーを仕掛けておきます。絶対にイけないよう、どちらも二十秒作動したら一分間停止。そのサイクルを三時間ほど繰り返しましょう。

「レイ君。私は他にも仕事がありますので、ここで一旦おわかれです」

「なっ……ふざける、なっ♡ おい！ 待っ♡ 待てよ！ 白髪頭！」

何やらうるさいですが、まあ気にせずに。

暴れるレイ君にひらひらと手を振って、部屋を後にしました。

私が戻ってくる頃には素直になっていることでしょうか。

## 2. 放置された使用人

僕が止めるのを無視して、執事頭の灰原が部屋を出ていった。

ベッドに縛りつけられるなんて屈辱くつじやくを受けたのも初めてだったのに、乳首に変なものを塗られたり、お尻に変な玩具を挿れられたり、本当に最悪だ。

「この変態白髪！ 鬼畜メガネ！ 悪魔！」

閉まった扉に向かって思いつく限りの罵詈雑言を並べ立てていたら、急に玩具の振動が止まった。

「あれ？ 電池切れ、かな……？」

やった。灰原のやつ、ちゃんと充電してなかったんだなと思いながら、叫ぶのをやめて頭を起こした。

自分の体を見ると、乳首ローターの周りには変な液体でべとべと。お尻からはローターの線が何本も出ている。旦那様の世話係になる準備がこれってことは、この後どうなるか簡単に想像できた。

ひであき

佐渡家の旦那様、秀昭さんは僕の一番上のお兄様と同級生。何かにつけて僕を除け者にするお兄様たちとはまったく違って、とても優しい人だ。

わがままばかりの僕に、「俺にはそんな態度をとらなくてもいい」と言ってくれたこともある。すごく男前で、僕がわがままを言わなくても構ってくれた、唯一の人だった。

だからといって僕は、こんな仕事をしたくて灰原にたずねたわけじゃない。秀昭さんのお世話を任されるようになれば、お父様も少しは僕に興味を持ってくれるかなと思っただけで。



「あの白髪ジジイ……絶対にぶん殴ってやる」

そう意気込んでも、まずは四肢を自由にしないことには始まらない。

かせ  
てんがい

枷は天蓋の柱に繋がれていて、ほんの少しだけ手足を縮めるゆとりがある。ぐっと上を向いてみると、革製の手枷に鍵穴が見えた。そこから天蓋の柱に黒いベルトが繋がっている。太くないから頑張って噛めば切れるかなと思っただけ、伸縮性が無くてどうやっても口が届かない。

「くっ……駄目か——あっ♡!？」

ベルトに噛みつくのをあきらめた途端、体に振動が走った。

「ひっ♡ く……う♡ やっ、やだっ♡ あっ♡ ああっ♡」

吸引で強制的に勃起させられてる乳首はただでさえ敏感になっているのに、そこにローターの振動があたって情けない声が出る。

声を抑えようと思って体に力を入れると、お尻に入ってるちっちゃいローターを締めつけてしまって、さっき灰原に指でとんとんされたところが余計と刺激されてしまう。こんな状態でずっと放置されたらどうしようと思うと、背中にぶわっと冷や汗が噴きだした。

「はあっ♡ 灰原！ 戻って来ないっ♡ おじい様に言いつけ——あっ？ あ、れ……？」

焦って叫んだのが恥ずかしくなるくらい、玩具の振動はすぐに止まった。やっぱり電池切れか、それとも接触不良か。まあ何でもいい。逃げるなら今のうちだと、再び枷を観察する。力づくで取れる望みがあるとすれば、枷とベルトをつないでいる金属の細い輪っか。手足を力いっぱい縮めれば、あの輪っかが開いてベルトが外れるかもしれない。

「ううっ……駄目か……」

太腿と脛ふともも すねのところで縛られて左右に開かされているせいで、足にうまく力が入らない。かといって腕力も鍛えてるわけじゃないから、腕をめいっぱい縮めてみてもびくもしない。

灰原が戻って来るまで、こんなに恥ずかしい姿で過ごさないといけないのか。毎日口うるさく叱ってくるあいつに助けを求めないといけないのか。

そう思うと本当に屈辱的で、その気持ちを糧に馬鹿力が出て枷があっさり外れでもすればよかったんだけど、現実はそのなにも都合よくいかない。

悔しいけど諦めるかと手足を投げ出した瞬間、僕の体をまた振動が襲った。

「——っ!?♡ あう♡ なんでっ♡ 動くの……♡!?」

接触不良だったところがちょうど繋がってしまったのかなと思ったけど、

こんなに何度も同じことが起きるのはおかしい。どうしてか考えてみると、そういえば。部屋を出ていく前、灰原が玩具のボタンをカチカチ弄っていたような気がする。もしかすると、何十秒か動いた後に止まる。そしてまた動くのを繰り返すように設定していたんじゃないだろうか。

振動はまたすぐに止まり。油断せず待ち構えていたら僕の思った通り、しばらくしてやっぱり振動が始まった。ベッドのサイドテーブルに置かれていた大きな時計の秒針を目で追って、振動が何秒続くのか調べる。

「……たった二十秒か！」

灰原の奴、イかせては休ませてを何度も繰り返して、僕を駄目にしてしまおうと思ったんだろう。こんな短時間なら余裕で耐えられる。ほんの少し我慢すれば休めるから、まったく疲れない。でも灰原の奴は、このまま僕を放

っておけば上手くいくと思ってる。

灰原が戻ってきたら、気を失ってるふりでもしよう。そうして枷を外された瞬間にぶん殴る。あんな白髪頭、一撃でノックアウトだ。

油断した灰原が僕に殴られて情けなく尻もちをつく。そんな姿を楽しく想像しながら、次の振動に備えた。

「——っあ♡ ふっ……うう♡」

振動が来るとあらかじめ分かっている。そしてすぐに止まると分かっている。焦ることもない。

「……ははっ！ やっぱり。こんなの全然余裕だ」

耐えるまでもなく玩具が止まって、自然と笑みがこぼれる。

こんな豆粒みたいな玩具、なんてことはない。そもそもの話、乳首とお尻

を弄られてどうなるっていうのか。僕がこんなことに屈すると思ってるなんて、灰原は本当に間抜けな奴だなと思うと笑いが止まらなかった。



そこから三十分くらい経ったか。

最初のうちは何ともなかったけど、さすがに少し息があがってきた。

灰原はまだ戻って来ない。他に仕事があるとか言ってたけど、いつ戻ってくるんだろうか。

「はあ……はあ……まあこんなの……全然、余裕だし……!」

でもそこからまた三十分。一時間経っても、灰原は戻って来ない。

「うあ♡ こんにちはの、ぜんぜん♡ よゆ……?♡」

自分の口から出てくる舌足らずな言葉を聞いて、体が変になってきていることをはつきり自覚した。振動が来るたびに全身がびくびく震えて、だんだんと舌も回らなくなってきた。

あれ？ あれ？　こんなはずじゃなかった。余裕だと思ったのに。

乳首とお尻だけで変になるはずないと思ったのに。

この玩具、すぐ止まって全然イかせてくれない。

ずっとイけないの苦しい。もう外してほしいのに灰原が来ない。

「ひゃんっ♡　だめっ♡　もう動かないでっ♡　止まってよお……！」

僕がどんなに嫌がろうと、玩具の振動は残酷なほど正確に、繰り返しやってくる。もうイキそうなところまで引き上げられて、止まる。ずっと射精できてないペニスが痛いくらい勃起して、先走りの汁がつつ、と後ろの方まで

垂れてきた。

「はあ……はあ……もう、やだ……」

ベッドにぐったりと体を預けていると、僕の真上。天蓋に緑色の小さなランプが光っているのが目に入った。

「……あっ！」

よく見たら、小型のカメラがつけてある。いつまで経っても戻って来ないと思っていたら、ずっと監視されていたらしい。

「おいジジイ！ これ、外せよ……！」

カメラに向かって叫んでみたけど、何の反応もない。

「おい！ 聞いてんのか!? 外せって言って——ひああ♡ やだっ♡ もう

やだあ♡♡ あっ、くうう♡ あっ♡ ああ♡♡ とっ、止めてえ♡♡♡」



せっかく活路を見いだしたのに、玩具の振動が僕を邪魔してくる。僕を監視しているであろう灰原に、こんな情けない声を聞かれたくない。けど全然我慢がきかなくて、喘ぎ声を垂れ流してしまう。

「はあ……はあ……灰原！　僕が苦しんでるの、そこでずっと見てるんだろ!?　あとで絶対、おじい様に言いつけて、やるから……!　僕がこんなことされたって、おじい様知ったら、お前なんてすぐクビに、なっっちゃうんだからな……っ!？」

こうやって脅せば灰原が走ってドアを開けに来るだろうと思ったけど、部屋の中はしんとしたまま。耳を澄ましても自分の呼吸の音がはあはあうるさいだけで、何の物音も聞こえてこない。

「……ねえ!?　ちゃんと聞いているの!?　僕、本当に、怒ってりゆうっ♡!？」

くひっ♡ ひい、んッ♡ あっ♡ イク♡ も、イキそう♡ いっっちゃう♡」

あと一息でイけそうなところで、また振動が止まる。余韻でどうにかいこうと思っ、一生懸命に玩具を締めつけてみても、快感の波がひいていくのを止められない。

「あうう……もうちょっと、だったのにつ……！」

僕、頭までおかしくなってきた。ついさっきまで止まってほしいと思っ、たのに、今はイクまで止まらないでほしいって思っちゃってる。

乳首とお腹の中、おちんぽと繋がってるみたいに気持ちいい♡このままイキたい♡いっぱいイかせてほしい♡♡

それなのに、灰原さんが戻ってきてくれない。怒っても脅しても、全然来てくれない。涙がぼろぼろこぼれて目の前がぼやける。

「ひっく……ご、ごめっ ごめんなさい……灰原、さんっ♡ 謝るからっ♡  
ちゃんと、言うこと、聞くから……!」

泣きながらカメラに向かって謝ってみても、部屋の扉は開かない。

「なんでっ!? なんで来てくれないの!? こんなっ、ひどい——あっ♡!?  
ひゃああ♡ ごっ、ごめんなさい♡ ごめんなさいしまひゅから♡♡」

乳首とおちんぼの裏側、ブブ♡って振動が当たるの気持ちいい♡♡おち  
んぼ触ってないのにずっと気持ちいいの♡♡イク♡あとちよっでイク♡♡  
それでもやつぱり、イク前に玩具が止まってしまう。

「ううづ♡ 止まっちゃ嫌♡ おねがいっ♡ もうイかせてよお……!」

もうイクことしか考えられなくなって、媚びるようにへこへこ♡って腰を  
振りながらカメラに向かってお願いしてしまう。

「ごめんなひゃい♡ まじめにつ、はたります♡ 遅刻も、しません♡  
灰原さんの言うこと、何でも、聞きますから♡ イかせてくだひゃい♡♡」  
なんて謝っても、灰原さんは全然戻って来ない。

振動がくる度、玩具みたいに体がビクン♡ビクン♡って跳ねて、言葉らしい言葉も口から出なくなつて。玩具が震える音と僕の喘ぎ声だけがひとりきりの部屋にずっと響いていた。

### 3. 執事頭の臨時業務（後編）

さて、諸々の仕事を片付けているうちにもう夕方です。レイ君もそろそろ素直になっている頃でしょうか。あの生意気な坊やがどんな顔をしているか、実に楽しみです。

私がそつと扉を開けますと、ちょうどローターの振動が止まっている時だったようで部屋の中はしんとしていました。

できるだけ足音を立てないようにベッドに近づいてみると、そこにはぐったりした様子のレイ君が。私がベッド際までやってきたのに気づいていないようで、天蓋をぼんやり見つめたまま胸で浅く息をしています。

「レイ君。ただいま戻りましたよ」

「あ♡ 灰原しゃん……やっとなてくれたあ……♡」

これはこれは。想定以上に塩梅よく仕上がつておりました。

寸止めを繰り返された体には汗が浮かび、射精できないペニスがかわいそうなほど膨れています。

うつろな目には涙が。そしてだらしく開いた口の端からは唾液をこぼしています。生意気なだけの坊やには責めが強すぎましたかね？

まじまじと観察しているうちに、ローターの振動が始まりました。

「あああ♡ 助けて灰原しゃん♡ これ全然っ、イケないのっ♡」

「それはそうでしょう。絶対にイケないよう設定しましたので」

「あうう♡♡ こんなっ♡♡ こんにゃお仕置き、ひどいっ♡」

「お仕置きではありませんよ？ 言っただけではありませんか。これは旦那様の

お世話係になる準備ですよ」

レイ君と会話しながら、乳首ローターの吸引カップを外しました。ぷつくりと膨らんでいます。どのくらい感度がよくなったか確認してみましよう。

二本の指で摘まんで、指の腹で押しつぶす。もう片方は指の先で搔くように弄りましようか。

きゅむっ♡ こりこりっ♡ ぎゅうう♡ かりかり♡

「きゃう♡!? ひゃっ、あん♡」

レイ君の胸がビクン♡ビクン♡と大きく跳ねて、先走りの汁がペニスから飛び散っています。

「おお。元々感じやすそうでしたが、さらに反応がよくなりましたね」

「ほおお♡ 乳首しゅごい♡ おちんぽみたいになってる♡♡」

このまま弄っていれば乳首だけでイけるかもしれません。しかし、まだイクのはお預けです。旦那様の今晚の楽しみにとっておきたいですからね。

そう思って私がぱつと手をはなすと、レイ君にすごい剣幕で怒られてしまいました。

「ああっ!?　なんで!?　なんで止めるの!？」

「おや。そんなに気持ちよかったですか？」

「いいのっ♡　もっとして♡♡」

「なるほど。では次の練習が上手くできた暁には、ご褒美としてもっと大きな玩具でたくさん可愛がってあげましょう」

「大きなおもちゃ……たくさん……♡♡」

私の言葉をうっとり復唱するレイ君。もう拘束を解いても逃げようとしな



くなりました。念のため、四つん這いになるよう拘束しておいて、次の玩具をベッド際にゴロゴロと運び、レイ君の目の前に設置しました。

今度の玩具は大きかり。キャスター付きの筐体きょうたいから金属ボールがのび、その先にはペニス型のデイルド。筐体に疑似精液のタンクが内臓されておりまして、チューブを通してデイルドの先から射精する機能があります。

これを使って、レイ君にお口で旦那様にご奉仕する練習をしてもらいたいと思います。

(サンプル版 おわり)

サンプルをお読みいただきありがとうございました！

#### ◆作品内容

ハート・濁点喘ぎを含む、ベッドシーン主体のBLノベルです。  
約3万5千字 + 挿絵4枚

- ・A6版PDF(縦書き)
- ・スマホ向け縦長PDF(縦書き)
- ・Web小説風PDF(横書き)

前半は執事頭の灰原さんによる調教パート  
後半は旦那様へのご奉仕パートです。

#### ◆プレイ概要

ベッドに拘束/無理矢理/調教/寸止め  
ローター/バイブ/コックリング/ローションガーゼ  
フェラチオ/電動オナホール/キスハメ/連続絶頂/中出し

※ハッピーエンドかは人によりけりです